『ガジェリー肩関節外科学』の紹介

医療法人南島整形外科　院長・理事長　南　島　広　治

はじめに

この度著者D.F.GAZIELLYの「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」の日本語翻訳版を医歯薬出版から刊行しましたので、著者の紹介、仏語翻訳出版の難しさ、本の解説そして仏語翻訳雑感について書かせて頂きます。

原題は「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」で直訳すれば『肩のリハビリと手術』ですが、内容を考慮して広く『肩関節外科学』としました。

ガジェリー先生

著者D.F.GAZIELLYはリヨン大学整形外科Albert Trillat教授の門下です。私とGazielly先生との出会いは、1996年私がパリで2年間の研修終了後小林晶先生より御紹介して頂いたのが縁で、サンテチェンヌの彼の職場を訪れ、約1ヶ月間彼の指導の元で肩の外科を研修しました。彼はヨーロッパで最初にプライベートの肩関節外科センターをサンテチェンヌに創設した人物です。

この街は人工股関節Dual Mobilitéの考案者であるCHU de Saint Étienne整形災害外科教授故Gilles Bousquetブスケ教授の勤務地でしたが、私が滞在した時は1997年4月でブスケ教授は前年4月に亡くなられており、残念ながらお会いする事はできませんでした。Gazielly先生はブスケ教授の下で股関節外科に従事された時期もあったそうです。

彼の印象はとてもfriendlyでトロントやニューヨークで肩関節外科のフェローの経験があるだけあって英語も堪能で、2人の男性看護師を助手に付けて手術を手際よくこなしていました。当時はまだスライドの時代で自宅には沢山のスライドを宝石箱のような箱に入れて整理されていました。自宅の訪問日誌には当時東海大学整形外科教授故福田宏明先生のサインが書かれていました。「HiroakiをフランスHiひと言えずイオアキ、私の名前Hiroharuもイオアウ」と読まれ、フランス語の発音の難しさを知りました。フランス人にしては珍しくゴルフが大好きでゴルフと庭仕事がストレス発散で、日本食の中では寿司が大好物とのことでした。

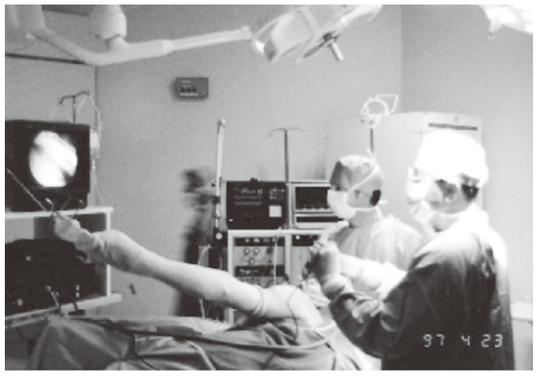
彼は学究肌で学会報告も多く、私の帰国直後、京都で開催の日仏整形外科学会で彼は「腱板補強術RCR(Rotator Cuff Reinforcement)」をテーマに招待講演を行いました。断裂部をポリエチレン製の腱板の補強材で修復する手術で、術後6か月で血管が増生し結合組織で置換されたことを証明する学会用のポスターを見せてもらい、目から鱗が落ちる思いだったことは記憶に新しいです。

その後1999年より2009年までパリのClinique Jouvenetの肩関節外科センター長、ジュネーブ大学整形外科の顧問医としてご活躍後、2011年よりスイスのGenolier Cliniqueに勤務されています。このクリニックには世界中のセレブが訪れており、診察室からはレマン湖、モンブランが展望できます。

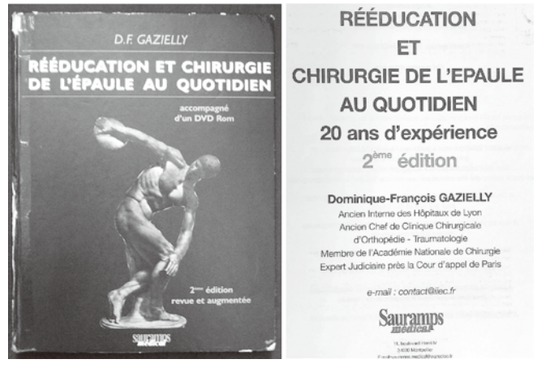
2017年の5月の連休にミラノの学会後にGenolier Cliniqueを訪問した際に、彼の名著「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」を謹呈されました。

このことが翻訳出版のきっかけです。、帰国後自宅でゆっくり目を通しますと非常に分かりやすく、日本の肩関節外科の教科書にはない、初学者にも専門医にも勧められる隠れた名著と思いました。それからすぐ

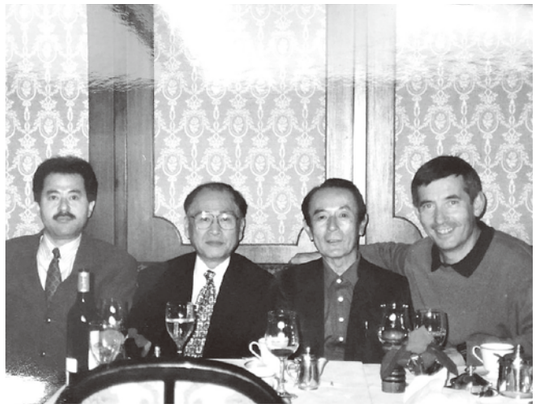
●1997年4月、サンテチェンヌ自宅にてガジェリー先生とツーショット、2年間une salle de gardeで昼食をいただきふくよか



●1997年4月、サンテチェンヌの病院、肩関節鏡手術



●原著:仏語「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」Dr.Dominique Gazielly, Sauramps, 2006.



●1997年京都にて日仏整形外科学会後ディナー、ガジェリー先生、小林晶先生、小野村敏信先生らと京都のフランス料理店「萬養軒」で懇親会

●2017年5月、スイス、ジュノリエクリニック、ガジェリ先生の書斎

に著者に翻訳の許可を頂き、初めての翻訳作業が始まりました。皆様からよく翻訳の仕事は辛くなかったかと質問を受けますが、教科書の内容が論理的で分かりやすく、フランス語の勉強と同時に肩関節外科の知識を深めることができ、また個人レッスンやアンステイチュ・フランセ九州で学んだ成果の集大成のつもりで取り組みました。

仏語翻訳出版の難しさ

フランス語翻訳出版の難しさについてですが、、福岡大学教授の塩田先生の「カパンジー機能解剖学」の場合を例にとりますと、お二人は既知の間柄で著者カパンジー先生から塩田先生に翻訳の依頼があり、フランスの出版社Maloineと医歯薬出版社、医歯薬出版と塩田先生の間で契約が交わされ翻訳の仕事に取りかかられたのに対し、私どもの場合フランスの出版社を通さず私たちの力で日本の出版社を探さなくてはなりませんでした。また、日本版で出版するかあるいは日本のどこの出版社に依頼するかの最終的決定権は著者にあるわけですから、著者とはできるだけ密に連絡を取る必要がありました。

著者からは「日本の出版事情は全くわからないので君に任せる」と言われましたので、私の方で探すようにしました。まず知人から紹介していただいた出版社Mに連絡しますと好意的で、担当者がわざわざ当院を訪問して下さりましたが、著者に相談したところ「Non」の返事でした。1冊本を数十回に分けて月刊医学雑誌に掲載して最終的に1冊で出版する計画でしたが、「自ら書いたデッサンには著作権があるから」ときっぱりと拒否。自分が手間暇かけて熱心に描いたデッサンや貴重な写真を無料では掲載させない。また出版の資金面の協力を製薬会社に依頼するように頼まれていました。私は翻訳本を出版して頂けるなら一流の出版社でなくてもよいから承諾しようと考えていましたが、著者の考えは「月刊雑誌にデッサンや写真を無料で掲載することは考えられない。時間と労力をかけて完成した翻訳を安売りはするな！むしろ出版社は我々二人に前提条件として謝礼を支払うべきである。」と大変強気でした。出版社側は著作権に対して金銭を支払うことは考えていないとのことで、「著作権について我が国とフランスの違い」が明らかになり、「訳者は著者の意見を尊重し優先すべき」と考え断念しました。

出版社1社当たり採用の有無の結果が出るまで2-4ヶ月かかりますから長期戦でした。小林先生は出版社が決まらず私が焦っていると思われたのか「呉々も出版に高額のお金を支払うことはしないように」とアドバイスを受けました。恐らく「自費出版はするな」ということだったと思います。著者も同様の意見だったと思います。

その後紆余曲折しましたが、平成30年12月22日慌ただしい年の瀬に医歯薬出版に電話したところ快いお返事を頂き、即座に翻訳文、解説、紹介、イラストやX線写真DVDを送りましたら、最初からすべて必要な書類が揃っていて出版社側は好印象で、年明けの1月7日の第1会議でパスしました。第2会議では「古い本2006年であっても菅谷先生らの2018年出版『肩関節手術のすべて』と比較してこういう良さがあるから翻訳本を出す意義がある」ことを示すようにと1週間の期限で宿題を渡されましたので、次のような回答を提出しました。「リバース型人工肩関節置換は1985年にフランスのGrammont先生の考案によるもので、本書は2006年出版とはいえリバース型人工関節を使用後20年が経過しており、しかものGrammont先生とリヨン大学の同門であるGazielly先生のリバース型人工肩関節に関する臨床成績とレントゲンの結果は説得力がある。またリハビリの注意点や禁忌事項が詳細に書かれており、我が国では見ない特徴です。一方でリバース型人工肩関節の我が国への導入はまだ4年と浅いので長期成績は不明な点も多い。アングロサクソンと異なるフランス人の哲学に基づいたフランス肩関節外科の伝統である独創性と斬新さが読み取れます」この回答で出版社からGoサインを頂きました。

翻訳完成後は小林先生から丁寧に監訳をして頂き、小林先生の監訳の辞、著者からの日本人向けの新たな序文と滋賀医科大学今井晋二教授から素晴らしい推薦の辞を戴き、本の信用度を一段と高めることができました。5月初旬に初校組デザインが決まり、初校正ゲラではフランス語の堪能な人のチェックにより未訳の部分も見落とすことなく、謙虚に「この部分は未訳なのでは？」と指摘され流石です。出版社の校正の方には頭が上がりません。校正で未訳部分はきちんと書き加えました。7月中旬に再校正、9月中旬に目次、注釈、文字統一、9月19日に本の表紙のデザインは6つのサンプルから私どもで選ばせていただき、書名や副題、定価も希望通りでした。

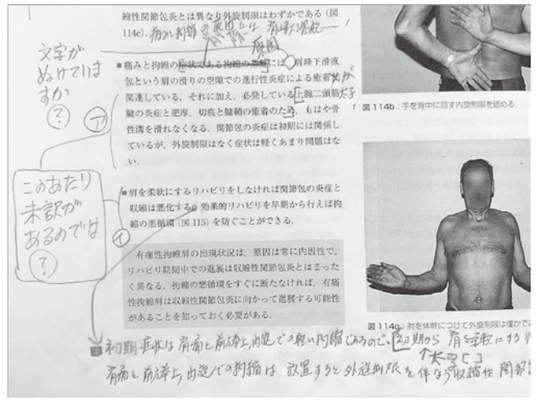
本の定価決定のお知らせを聞いた瞬間は大変感激しました。長い時間をかけた努力が報われ出版が現実のものになり、それまでの長い苦労のトンネルからやっと脱出できた独特の安堵感を味わいました。国内の主な出版社三社からの最近20年の仏語から和訳の翻訳出版状況を調査しました結果、医歯薬出版からKapandji先生の「カパンジー機能解剖学Ⅰ～Ⅲ」・「カパンジー生体力学の世界」、Dubrana先生の「整形外科手術進入路マニュアル」いずれも訳者は塩田悦仁先生そして我々「ガジェリー肩関節外科学」、医学書院から「触診解剖アトラス」第2版2007年訳者セラピストの1点で南江堂は0点でした。医学界では英語からの翻訳は多いが、仏語からの翻訳は極めて少なく、外科学の教科書は初めてのようです。

本の解説

本書は肩関節外科の教科書であり、初診から画像、臨床診断、鑑別診断そして手術、リハビリテーションまで体系化され、特に肩の外傷とリハビリテーション、腱板断裂、人工肩関節置換術の章に重点をおいています。

フランス人らしく大変独創的で、本を開けば臨床の現場の雰囲気が伝わります。また、著者が1人のため編集ものの著作に比べ、各章でフィロソフィーに区別はなく、全章を通じてX線像や関節鏡写真、イラスト、記述に統一感があり、勉強する際に読者の記憶に残りやすいかと思われます。また難しい言語は注釈を付けるなどの工夫をしてわかり易くしました。

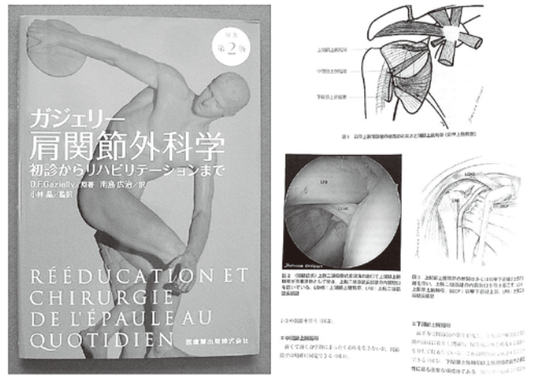
著者のサイン入りのイラストは自らの力作で、原著にも使われた著者のお気に入りの表紙の「円盤投げ」は紀元前のギリシャの彫刻家ミュロンの傑作で、著者はこれをロゴマークと同様に使用しているそうです。



●初校正ゲラ、未訳の部分も見逃すことなく謙虚に御指摘された

翻訳 ＼ 出版社	医歯薬出版	南江堂	医学書院
仏語 ⇒ 日本語	カパンジー 『カパンジー機能解剖学Ⅰ～Ⅲ』 『次世代へのメッセージ カパンジー生体力学の世界』 塩田悦仁 Dubrana 『整形外科手術進入路マニュアル』 塩田悦仁 ガジェリー 『ガジェリー肩関節外科学』 南島広治	0点	2000年以降 1点のみ
英語 ⇒ 日本語	年間10点	外科 1点 内科 0点 学生 1～2点 （年間の翻訳数）	58点 （直近5年）

●最近20年間の三社での翻訳出版状況



●ドミニク·ガジエリ著，南島広治訳，「肩関節外科学」:228頁，A4判，医歯薬出版，2019年10月

表紙やイラストにもこだわりを持ちフランス人の芸術性の高さを感じ取ることができます。

滋賀医科大学整形外科今井晋二教授は本書の推薦の辞で「オリジナリティーの豊かなフランス人の考え方を学ぶ事は日本人が普段の診療の中で固定化した考えの中から一瞬の新しいひらめきを得る糧になるだろう」と述べておられます。船橋整形外科病院の老沼先生も第14回AFJOで「固定観念からの脱却」をテーマにされていました。特にアングロサクソン医学に影響をうけた我々はフランス医学の独創的な発想にはしばしば驚かされます。本書を手に取りフランス人の哲学に基づいたフランス整形外科の伝統的な独創性と斬新さを読み取ることで、きっと新たな研究のテーマが思い浮かび、読者の期待に応えてくれると信じています。

仏語翻訳雑感

翻訳とは他人のふんどしで相撲をとるようなものであると批判する人もありますが、幸徳秋水はご自身の翻訳「20世紀の怪物帝国主義」の苦労の経験から、「翻訳は著述より遥かに困難で少なくとも著述に劣るところはない」と賞賛され勇気を貰いました。翻訳の大家である堀口大学は「翻訳こぼれ話」の中で次のように述べています。「詩をわがものに、原作に仏語の着物を脱がせ、一度裸にした上でこれに僕の言葉の書物を着せる以外の手はないと気づいた。つまり僕の訳詩は恋焦がれる美人のやわ肌に触れると同じ気持ちでなし続けられたというわけだ」大家らしく何ともニュアンスのあるお言葉ですが、私の場合は医学書ですから、文学作品とは違いやわ肌に触れると同じ気持ちにはなりませんでしたが、本に対する愛着は著者に劣らず、何度も読み直し私なりの分かりやすい言葉の着物を着せています。

おわりに

もしもスペシャリストとしての道を歩み続けていたら、この度の肩関節外科学の翻訳に着手していただろうか？私にとって仏語は英語、独語に次ぐ3つ目の外国語で、しかも得意分野とはいえない肩関節外科学を翻訳出版できた事は全く予期せぬ運命的なご褒美のような気がしてなりません。語学も継続したらどなたでも身近にチャンスがあるということではないかと思います。

失望の時もフランスで知り合った友人や恩師から元気を貰い人生のビタミンになっており、仏語は人生を豊かにする武器になり得ると思います。

小林晶先生をはじめ国内外の多くの素晴らしい先生方に出会い、医学のみならず文学、音楽、絵画などフランス文化に触れる機会が増え、大いに楽しませていただいています。私は故なだいなださんのご意見に賛成で、フランスには仏語の分かる日本人にしか見つけられない宝があり、発見した喜びは仏語を学んだ者しか分からないということです。

この度の「ガジェリー肩関節外科学」が先生方のお役に立ってくれることを願ってやみません。何度も何度もお会いして監訳をしていただきました小林晶先生には心から感謝申し上げます。

今後も仏語の勉強の醍醐味の一つである宝探しの旅を続けて新しいもの、予想外のものを発見し、会員の皆様にご報告出来れば幸いと考えています。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員

会　長	金子　和夫	名誉会員
副会長	大橋　弘嗣	
書記長	藤原　憲太	
会　計	青木　　清	顧　問
書　記	前田　　勉	交換研修委員
幹　事	安永　裕司	
	久保　俊一	
	本間　康弘	交換研修外部委員
	今井　晋二	
	飯田　　哲	
	田中　康仁	
	星　　忠行	
	小野村敏信	
	小林　　晶	
	坂巻　豊教	
	瀬本　喜啓	
	水野　直子	
	西脇　　徹	
	金城　　健	
	竹本　　充	
	大槻　周平	
	藤城　高志	
	内藤　聖人	
	市原　理司	

フランス側役員

President	Philippe Hernigou (Paris)
Secretaire General	Philippe Merloz (Grenoble)
Tresorier	Philippe Wicart (Paris)
Membre de Bureau	Philippe Liverneaux (Strasbourg)
	Alain Durandeau (Bordeaux)
	Jean Pierre Courpied (Paris)
	Jacques Caton (Lyon)
	Olivier Guyen (Lyon)